

老医へのよろず相談

患者さんに人生相談までされることがある。年寄りには物知り、と思うひとがいるのか？気楽に相談できるひとが少なくなったせい일까？ま、頼られるのはうれしい。でも、けっこう苦戦する。

脳梗塞で通院中のM子さん。「誰かが勝手に家の中に入ってくるようだ。庭にタバコの吸い殻が落ちている。外出できない。どうしよう？」という相談だ。下手に答えると、近隣トラブルのもとになる。何度か話しを聞こうちに、事実らしきものが見えてくるだろう。

認知症の患者さんでは、もの盗られ妄想や被害妄想などがよく起きる。妄想なら精神科へ紹介するか。しばらくは黙っていいう。

A子さんは、夫が認知症で通院中だ。声を潜めて、「認知症のひとつは、銀行口座が凍結されるってホント？」と不安げだ。銀行がどうして認知症と判断するのか疑問だが、本当なら深刻な問題だ。

認知症のひとつの財産管理などについて
は、成年後見制度がある。いろいろな理由

で普及しない。今年からは、家族関係が証明されるものを提示すれば銀行口座は使えるようになったはずだ。でも、詳しいことは分からない。「調べておきます」と応えた。

ホソネは、銀行で尋ねたほうが確実な情報を得ることができるのに、ということだ。でも、Aさんは、認知症に関係したことはなんでも医者は知っているはずなのに、と少しがっかりした様子だ。

で、つい愚痴が出そうになる。が、なら、医者なんかやめたほうがよい。楽になる。でも、^{「おちこち」}「楽隠居^{らくいんご}」^{「おちこち」}「楽隠居^{らくいんご}」に苦しみ、余り苦しい。そんな自分の姿が見えるようでもある。

ここはボンクラらしく、少しでも知識を増やすことで苦しんだほうがマシか。「まあ、勉強しよう」と意気込んだ。が、ただけ頭に残るやら。

(石黒修三「いしへろクリニック・脳神

経外科専門医」10/13 北國新聞掲載)